

法士南遺跡

第2次発掘調査報告書

—太陽光発電施設設置工事に伴う発掘調査—



令和4年3月

彦根市

例　　言

1. 本書は彦根市法士町に所在する法士南遺跡の第2次発掘調査報告書である。
2. 調査に関する調整、現地調査ならびに整理調査は彦根市が行った。所在地・調査期間等について以下とおりである。

現地調査	所在地：彦根市法士町字中ノ道25番1　外4筆
	調査原因：太陽光発電施設設置工事
	期間：令和3年4月19日～令和3年5月14日
整理調査	期間：令和3年5月17日～令和4年3月31日

3. 本調査は、彦根市歴史まちづくり部文化財課が実施した。調査の体制（令和4年2月1日現在）は下記のとおりである。

【令和3年度】（現地調査・整理調査）

市長：和田裕行

歴史まちづくり部長：荒木城康

歴史まちづくり部次長：久保達彦

副参事兼文化財課長：井伊岳夫

主幹兼史跡整備係長：鈴木康弘

主幹：小林 隆

課長補佐兼管理係長：牧田歩

副主幹：三尾次郎

文化財係長：林 昭男

主査：戸塚洋輔

主査：多賀公一

主査：田中良輔

主任：斎藤一真

主任：鈴木達也

主任：佐々木香会

主事：西坊仁志

主事：北村双葉

技師：加藤利樹

技師：船山友裕

技師：内藤 京

会計年度任用職員：飯島由紀子

会計年度任用職員：谷田わかな

会計年度任用職員：沖田陽一

会計年度任用職員：樋口杏奈

会計年度任用職員：宮崎幹也

会計年度任用職員：岡田ひとみ

会計年度任用職員：久保亮二

会計年度任用職員：豊村たまき

会計年度任用職員：小野直子

会計年度任用職員：阿部春香

会計年度任用職員：春名英行

会計年度任用職員：川崎あかね

4. 現地調査と整理調査は林が担当し、以下の諸氏が参加した。

現地調査：公益社団法人滋賀県シルバー人材センター連合会と派遣委託業務契約を締結
し、公益社団法人彦根市シルバー人材センターから作業員を派遣いただく。

整理調査：宮崎幹也、小野直子、久保亮二、樋口杏奈

5. 本書で使用した遺構実測図は、林、久保亮二が作成し、遺物実測図は、宮崎幹也、小野直子が作成した。遺構と遺物の写真撮影は、林が行った。

6. 本書の執筆及び編集は、林が行った。

7. 本書で使用した方位は真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。

8. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市で保管している。

9. 本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。

土師器・陶器

須恵器

目 次

例言

第1章 序 論

第1節 調査に至る経緯と経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 発掘調査・整理調査の経過と方法	2
第2節 地理的・歴史的環境	3
(1) 地理的環境	3
(2) 歴史的環境	4
(3) 法士南遺跡の概要と既往調査	14

第2章 発掘調査の成果

第1節 基本土層および検出遺構の概要	15
(1) 基本土層	15
第2節 検出遺構と遺物	15
(1) 概 要	15
(2) 堅穴建物	15
(3) 檻or掘立柱建物	18
(4) 道路遺構	18
(5) 溝	18
(6) 土坑	21
(7) 小穴	22
(8) その他	30
(9) 小結	31

第3章 総括

第1節 法士南遺跡第2次発掘調査検出の道路遺構の検討と今後の課題	
(1) はじめに	32
(2) 犬上川左岸扇状地上における古代東山道の既往調査と研究の整理	32
(3) 道路遺構 (SF1) の検討と今後の課題	33

図版

報告書抄録

第1章 序論

第1節 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯 (図4・5・15、表4)

本書は、民間開発により実施した法土南遺跡第2次（彦根市法土町字中ノ道25番1 外4筆）発掘調査の成果をまとめたものである。

法土南遺跡は、彦根市法土町に所在する古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。大上川の左岸に位置し、同河川が形成する扇状地の標高104～105mに位置する。調査地周辺一帯は、水田や畠などの耕作地としての土地利用が広がっている地域である。今回の調査地点も、開発計画以前は水田としての土地利用が行われていた。

今回の記録保存を目的とする発掘調査は、民間開発事業者が計画した太陽光発電施設設置工事に先立ち提出された文化財保護法第93条の届出（令和2年6月16日付け）及び調査依頼（令和2年6月16日付け）に基づくものである。届出の提出に伴い、開発予定地における遺構・遺物の有無を確認するため、令和2年8月12日に試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定面積約1,730m²を対象として試掘トレンチを6箇所（2m×2m）設定してバックホーにて掘削、細部は人力による掘削・検出作業を行い、遺構・遺物の確認を行った。

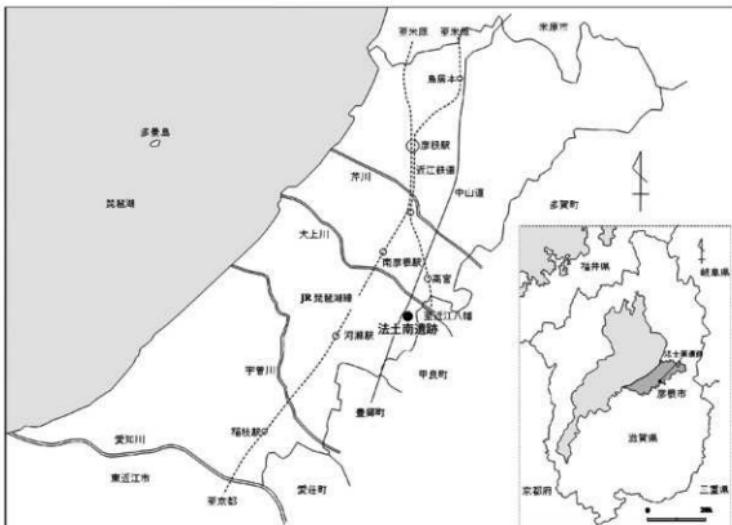


図1 法土南遺跡の位置図

試掘調査の結果、1層：にぶい黄橙色粘質土、2層：にぶい黄褐色粘質土、3層：灰黃褐色粘質土、4層：黄褐色粘質土、5層：にぶい黄褐色粘質土、6層：褐色砂礫混じり粘質土、7層：黄灰色砂礫の7層を確認した。1層は表土・現代耕作土、2層は耕作土、3層は包含層で、この包含層直下の4層で奈良時代前後の遺構・遺物を確認した。設定した試掘トレンチT1～T6の全てで溝や小穴などの遺構と、土師器や須恵器の遺物を確認した。特にT4・T5は遺構・遺物の密度が高かった。ここでは、試掘調査の出土遺物を一部提示する。T4からは土師器（1・2）と須恵器（3～6）、T5から須恵器（7）が出土しており、概ね7世紀末～8世紀前半の遺物が確認されている。このように開発予定地全域の試掘トレンチで遺構・遺物が確認されたため、開発業者と対応に関する協議を行った。当初の開発計画は、開発地全域を鏟取り後に造成を行い、その上に打ち込み式の太陽光発電設備を設置する予定であったが、試掘調査の結果を受けて遺跡保護の協力を求めたところ、開発計画の変更に応じていただいた。すなわち、鏟取りは地面を均す程度の最低限（約10cm）に抑え、遺構面への保護層を確保し、太陽光発電施設の基礎工法も、打ち込み式のものからコンクリート構造物を据え置く重力基礎工法に変更いただき、地下遺構への影響を及ぼさないよう配慮いただいた。この計画の変更により、今回の開発予定地の大部分について遺跡の保護が実現し、開発予定地のL字の擁壁設置範囲についてのみ、今回の記録保存調査の対象範囲とした。対象面積は約97m²になる。現地の発掘調査は令和3年4月19日に着手し、令和3年5月14日まで実施した。整理調査に関しては、令和3年5月17日～令和4年3月31日まで行い本報告書の刊行となった。

調査にあたっては、開発業者・土地所有者・近隣住民を始めとする関係者にご理解とご協力を賜った。特に、今回、遺跡の保護に理解を示し、計画変更に応じていただいた開発業者である隆建設（代表 山本隆夫）様には、厚くお礼を申し上げたい。

（2）発掘調査・整理調査の経過と方法

今回、現地の発掘調査とそれに伴う整理調査を同年度内で実施することとなった。発掘調査・整理調査実施にあたり、彦根市と民間開発事業者との間で埋蔵文化財発掘調査事業受託契約書（令和3年4月19日付け）を取り交わし、契約締結後に現地調査を開始した。

調査は、試掘調査の成果に基づき、遺構面直上まで重機による掘削を行い、その後の調査は人力により行った。グリッド設定だが、今回の調査範囲は、太陽光発電施設設置工事の造成に伴うL字擁壁部分のみであり著しく狭長であるため、図化作業の効率を勘案して掘削範囲の平面形状に沿う方位でグリッド設定を行い、グリッドの基準となる複数点に平面直角座標値を落とした。グリッド番号は南東端から北西側に向かってアルファベットを付け、北東端から南西側に向かって数字を付した。遺物は基本的に遺構・土層ごとに取り上げたが、遺構を伴わない遺物の取り上げはグリッドごとに行い、北東隅にあるグリッド杭の番号を代表させた。遺構図はグリッドを基準に、1/100の遺構分布図と1/20の遺構平面図を基本とし、

状況に応じて1/10の遺物出土状況図等を作成したほか、1/20の調査区および各遺構の土層断面図を手実測により作成した。遺構の名称については、文化庁発行の『発掘調査の手引き－集落遺跡発掘編一』記載の略号を用いている。これと数字との組み合わせで遺構名とするが、遺構の種別に番号を与えるのではなく、遺構の種別に関わらず1から二桁の通し番号としている。これにより、各遺構に固有の番号を与えることになり、調査の途上、あるいは整理の過程で遺構の種類に関わる解釈の変更があった場合にも、略号のみを変更し、番号を変更することなく対応できる。ただし、掘立柱建物や柵、道路遺構など複数の遺構が一体で構成されるものについては、その種別ごとに1から通し番号を付与した。現地の発掘調査は令和3年4月19日に着手し、令和3年5月14日まで実施した。

現地調査終了後、すぐに整理調査を開始した。

整理調査だが、遺構図は、原図作成のちトレースを行い、図版の作成を行った。遺物は、洗浄・注記・接合・選別・実測、そして原図作成のちトレースを行い図版の作成を行うとともに、遺物の写真撮影を行った。同時に調査成果の検討・文章作成・全体の編集作業を行い報告書の刊行となった。

整理調査に関しては、現地調査終了後の令和3年5月17日に着手、令和4年3月31日まで実施した。これら一連の発掘調査・整理調査によって得られた資料および成果物については彦根市で保管している。

第2節 地理的・歷史的環境

(1) 地理的環境(図1・2)

日本列島の中央に位置し、東西交通の要の位置にある滋賀県、その滋賀県の中央に広がる琵琶湖の東岸に彦根市は位置する。市域の平野は、芦川、犬上川、宇曽川、愛知川の四河川による堆積で形成されている。法土南遺跡は、彦根市法士町に位置する古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。遺跡は鈴鹿山系から琵琶湖に注ぐ犬上川左岸、標高104~105mの扇状地に位置する。

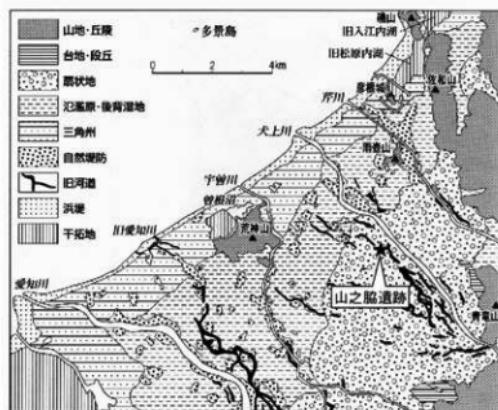


図2 磐根市の自然地形（『新修磐根市史』第1巻より）

犬上川は滋賀県東部を流れる流域面積105.3km²、流路長27.3kmを測る一級河川である。源を鈴鹿山中の鞍掛峠と角井峠に発し、湖東平野を潤して彦根市中央部で琵琶湖にそそぐ。標高130mから100mにかけて多賀町樺崎付近を扇頂とする扇状地を形成しており、滋賀県下最大規模の扇状地を形成しており、降水量の少ないときには、扇頂である標高130mのあたりから標高100mのあたりまでの中流域で伏流し、水無川となる。また、標高100mから90mにかけて再び水が湧出しているが、必ずしも河道に沿って元來の河川水が湧き出しているのではない。

調査地は、犬上川左岸の法士町に位置する法士南遺跡の北端部に位置し、遺跡の北西部約40mの位置には中山道が走っている。市域の中山道のルートは基本的に古代東山道を踏襲しているとされるが、犬上川左岸の当該地周辺では、南北で直線的に伸びてきた中山道がやや琵琶湖側に迂回しているという特徴がある。歴史地理学の分析では、当該地周辺の中山道のルートは、基本的に直線を旨とする古代東山道のルートとはズレが生じている可能性があるとされる地域で、その分析で推定されている古代東山道のルートは、今回の調査地の南東沿いの南北に走る市道周辺と考えられる。

(2) 歴史的環境（図3、表1、写真1）

旧石器時代 彦根市域だけでなく、滋賀県下でも、この時代の石器や遺構がまとまって出土した遺跡はなく、わずかに米原市筑摩伝跡や立花遺跡でナイフ形石器や搔器が確認されている。また、芹川の上流にあたる多賀町久徳から中川原にかけてナウマン像の臼齒の化石が見つかっており、旧石器人との関わりが推定される。

縄文時代 彦根市域では、屋中寺廃寺遺跡で早期の高山寺式土器、福満遺跡で前期末の大歳山式土器が確認されている。このように早期より遺物の出土は確認されるが、遺構を伴い、遺物量が増加するのは中期末から晩期に入ってからである。犬上川流域では福満遺跡を中心に、土田遺跡（多賀町）・敏満寺遺跡（多賀町）・小川原遺跡（甲良町）・北落遺跡（甲良町）・金屋遺跡（甲良町）などが当該期に当る。福満遺跡では、落ち込みから中期末の北白川C式から後期前葉の北白川上層式2式までの土器が出土している。敏満寺遺跡（多賀町）では石囲い炉を持つ竪穴建物や土坑が確認されている。小川原遺跡（甲良町）では、後期前葉の北白川上層式二期の配石墓や配石遺構、住居などの遺構が7,000m²以上の広い範囲で見つかっており、犬上川流域における当該期の中心的な遺跡と考えられている。後期後半から晩期前半に入ると金屋遺跡（甲良町）で竪穴建物や柱列が確認され、金屋遺跡の規模が縮小する頃になると、下流の北落遺跡（甲良町）で後期後葉から晩期初頭の小規模な配石遺構などの遺構が確認される。また、福満遺跡の旧河道より晩期後半の土器や石器が確認されている。下流域では、早期末以降、遺物の出土がなかった屋中寺廃寺遺跡でも中期末になって再び土器が出土するようになる。犬上川と宇曾川の中間地帯に位置する鶴ヶ池遺跡では後期後葉の宮滝式土器が確認されている。

松原内湖湖岸沿いに位置する松原内湖遺跡では、中期末から晩期末までの土器や石器、木

器などの遺物が大量に出土した。特に、当該遺跡が湖岸に近く地下水位が高いことより、丸木船や飾り弓、ヘラ状木製品などの多くの木製品が出土した。

弥生時代 前期の様相は不明瞭だが、芹川流域の大岡遺跡（多賀町）や犬上川流域の尼子遺跡（甲良町）・北落遺跡（甲良町）・金屋遺跡（甲良町）などの扇状地で前期の土器が出土している。これらは、縄文時代後・晩期から継続している立地であるが水田に適さない犬上川扇状地に位置し、これ以降継続するものではない。尼子遺跡（甲良町）では、弥生時代前期の遠賀川系土器と縄文時代晩期末の凸帯文土器がともに出土している。市域では竹ヶ鼻庵寺遺跡や稲里遺跡で前期の土器の出土が確認されている。特に、稲里遺跡では前期新段階の小穴から、大量の稻穂とともにアワ、ヒエ、キビの種子が発見されており、弥生時代の農耕を検討する上で重要な資料である。

中期以降は、琵琶湖側の沖積低地部に遺跡の分布は移動する。宇曾川流域には、中期の集落遺跡である川瀬馬場遺跡、同じく集落遺跡で中期から後期にまで及ぶ妙楽寺遺跡がある。犬上川流域では、中期の方形周溝墓群などが確認されている福溝遺跡、後期の方形周溝墓などが確認されている堀南遺跡、同じく後期で竪穴建物を伴った福溝遺跡がある。このように、中期以降宇曾川・犬上川流域では、扇状地の扇端より下流の沖積低地部に集落が展開する傾向にある。これは、扇状地の扇端部における湧水の灌溉利用との関係が考えられる。

愛知川流域の稲部遺跡・稲部西遺跡では弥生時代後期後半から古墳時代初頭を中心とする拠点集落が確認されている。

古墳時代 古墳時代では、前期末に荒神山山頂付近に大型の前方後円墳である荒神山古墳が築造される。その規模・立地などから、愛知郡・犬上郡を含む湖東平野北部を代表する首長墓と考えられる。荒神山山中では、中期の古墳は未だ確認されておらず、山麓の字「塚村」に中期古墳の存在の可能性を指摘する意見があるが確認には至っていない。後期に入ると山中全域に群集墳の広がりが確認される。その中でも、荒神山古墳群山王谷支群の1号墳などで、ドーム状の玄室を持つ石室が確認されている。同様の石室構造は入江内湖の南端に位置する磯山の西端部に形成された磯崎古墳群や大津市北郊域の野添・大谷・大谷南・熊ヶ谷・百穴・福王子古墳群などで見られ、渡来系氏族との関連が指摘されている。

市域北部、芹川や犬上川流域では、前期の遺跡としては、藤丸遺跡・品井戸遺跡・福溝遺跡・堀南遺跡・横地遺跡・段ノ東遺跡・本曾遺跡（多賀町）・土田遺跡（多賀町）などが確認されている。そして、中・後期段階になって、正法寺古墳群・葛籠北遺跡・横地遺跡・神ノ木遺跡・段ノ東遺跡・鞍掛山などに古墳などが築造されるようになる。また、犬上川左岸の八坂東遺跡からも円筒埴輪や朝顔形埴輪、蓋形埴輪の出土が確認されている。また、犬上川流域の扇状地に位置する、北落古墳群（甲良町）や金剛寺野古墳群（愛荘町）などでは、階段状施設を持つ石室を中心としており、これらの特殊な石室構造を持つ集団はいずれも渡来系氏族との関連が強いと考えられる。これらに対して、犬上川左岸に位置する段ノ東遺跡や葛籠北遺跡では横穴式石室を採用しない群集墳が確認されている。これらの群集墳は、扇

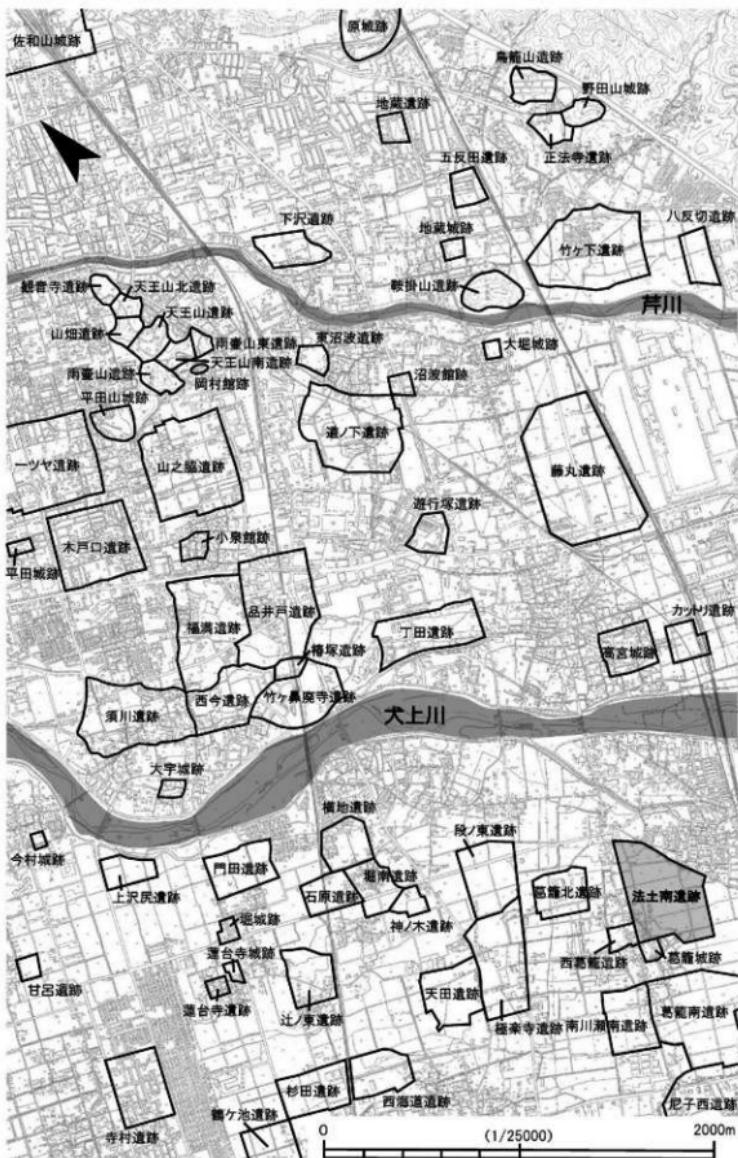


図3 法土南遺跡と周辺の遺跡分布図



写真1 法士南遺跡周辺の航空写真（平成21年12月1・2日撮影）

状地端部の湧水地点に立地していること、葛籠北遺跡では1号墳およびSK9土壙墓において、収穫具である鉄製の鎌が象徴的に副葬されていることなどから、生産性の高い沖積平野において、水田経営に従事した在地有力層の墳墓群と考えられる。なお、段ノ東遺跡では方墳群であるSX3で家形埴輪、SX4で円筒埴輪が出土している。集落関連では、犬上川流域の扇状地に位置する木曾遺跡（多賀町）、長野遺跡（愛荘町）、なまず遺跡（愛荘町）などで「大壁造り」と呼ばれる建物遺構が検出されている。これらは、階段状施設のある横穴式石室の分布域と重なっており、渡来系氏族関連の遺跡と推定される。同じく扇状地に位置する下之郷遺跡（甲良町）、北落遺跡（甲良町）、軽野正境遺跡（愛荘町）などで、中期の5世紀後半頃になると竪穴建物で龜が導入される。

市城南部では、愛知川と宇曾川に挟まれた沖積地で集落の形成が顕著となる。下流域の普光寺遺跡では古墳時代初頭から前期、芝原遺跡では前期を中心に確認されており、中流域の稻部遺跡や長野遺跡（愛荘町）でも同時期の集落が確認される。芝原遺跡では国内最古級となる4世紀後葉の鍛治工房跡が見つかっている。5、6世紀の鍛冶関係遺跡の多くが、拠点的な集落に多く見られることを考えれば、荒神山古墳の造営、また、塚村古墳の存在の可能性から芝原遺跡での鍛冶工房跡の発見は重要である。これらの遺跡は中期になると衰退し、この時期の遺跡数は少ない。後期になると、芝原遺跡で再び集落が形成され、なまず遺跡（愛荘町）で6世紀末頃の切妻大壁造建物が検出されていることは特筆され、渡来系氏族との関係が推測される。後期のゲホウ山古墳は、調査面積が限られたものであるため墳形や規模は不明であるが、鶏形埴輪や馬形埴輪、蓋形埴輪、人物埴輪など豊富な種類の形象埴輪が出土しており、その豊富な埴輪の様相より、当該地周辺の首長の墳墓であったと想定される。

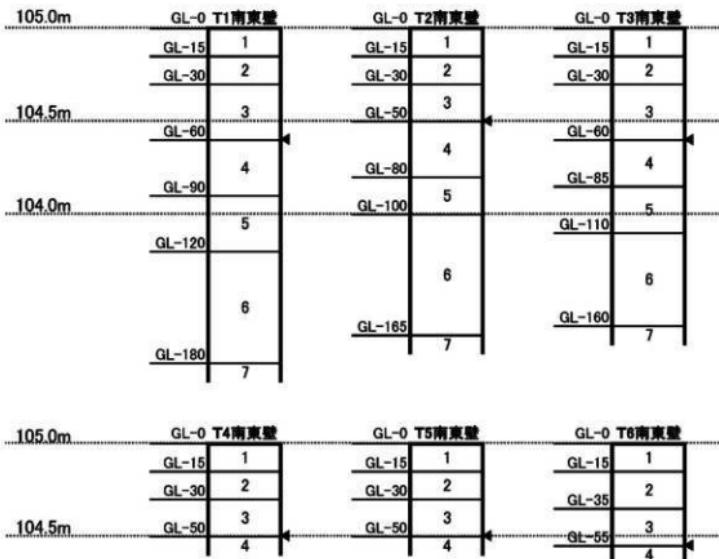
飛鳥・奈良時代 7世紀後半になると、新しく伝來した仏教の影響の下に、権力の象徴が古墳から寺院へと変化する。彦根市域でもこれら古代寺院の比定地が6箇所想定されている。犬上川流域の高宮廃寺（遊行塚遺跡）・竹ヶ鼻廃寺遺跡・八坂東遺跡、愛知川流域の屋中寺廃寺遺跡・下岡部廃寺・普光寺廃寺遺跡である。高宮廃寺は、高宮町の小字「遊行塚」にかつてあった塚状の高まり周辺に位置したと伝わり、白鳳時代後期の藤原宮式の軒瓦のセットが確認されており、藤原宮の造営に関わった近江の有力氏族との関係が想定される重要な遺跡である。竹ヶ鼻廃寺遺跡は、竹ヶ鼻町の小字「上寺海道」「下寺海道」「石仏」「薬師堂」「四反地」などに所在し、出土瓦より白鳳時代創建の犬上郡最古の寺院と考えられている。そこで使用されている山田寺式瓦は、湖東地域に分布する山田寺式瓦の中で最も古い形式とされており、その祖形は摂津の四天王寺と考えられ、四天王寺が対外交渉の拠点であった難波津にあることなどから、対外関係に著しい活躍のみられる犬上氏がその造営氏族の可能性が高いと考えられている。また、竹ヶ鼻廃寺遺跡では、かつての調査で南北軸の掘立柱建物群や櫛跡、井戸跡などの遺構群を検出しており、これらは古代の犬上郡役所（郡家）の可能性が高いと考えられている。八坂東遺跡は、犬上川下流域左岸、現在の滋賀県立大学周辺一

表1 法士南遺跡周辺的主要遺跡一覧

市番号 202-	遺跡名稱	所在地	種類	時代	立地	現状	備考
11 090	佐和山遺跡	彦根市 佐和山町	城砦跡	中世	山頂-山麓-平地	山林・水田	石碑・古墳・土塁
31 031	觀音寺遺跡	彦根市 井川町	散布地	中世	山頂	山林	
32 032	天王山北遺跡	彦根市 井川町	散布地	古墳-平安	山頂	山林	
33 010	天王山東遺跡	彦根市 和田町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳?
34 033	天王山南遺跡	彦根市 井川町	散布地	中世	山頂	山林	
35 034	天王山南遺跡	彦根市 井川町	散布地	中世	山頂	山林	古墳?
36 036	西原山遺跡	彦根市 山之脇町	散布地	古墳	山頂	山林	古墳?
37 039	向原山東遺跡	彦根市 山之脇町	散布地	中世	山頂	山林	古墳?
42 007	一ツや遺跡	彦根市 平田町	散居地	古墳-中世	平地	水田・宅地	
43 006	木戸口遺跡	彦根市 平田町	散布地	縄文-中世	平地	水田・宅地	
44 037	山之脇遺跡	彦根市 山之脇町	散布地	古墳-中世	平地	水田・宅地	
45 044	下沢遺跡	彦根市 西沼野町	散布地	古墳	平地	水田・宅地	
46 046	猪籠山遺跡	彦根市 桑原町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	円墳
47 047	五反田遺跡	彦根市 正法寺町	散居地	古墳	平地	水田	
48 048	鶴原山遺跡	彦根市 正法寺町	墓跡	奈良	山頂	山林・水田・宅地	瓦窯跡
49 049	正法寺遺跡	彦根市 正法寺町	古墳	古墳	平地	水田	
51 018	瀬川遺跡	彦根市 野瀬町	散布地	古墳-中世	平地	水田・宅地	
52 015	福若山遺跡	彦根市 西今町	集落跡	縄文-中世	平地	水田・宅地	聖穴津跡・土丸溝古墳
53 016	西今遺跡	彦根市 西今町	散布地	古墳-中世	平地	水田・宅地	近西今塙遺跡
54 012	井戸山東遺跡	彦根市 小糸町	集落跡	縄文-中世	平地	水田・宅地	聖丘山跡・石器
55 013	神保山遺跡	彦根市 箕ヶ森町	古墳	古墳	平地	水田・宅地	古墳?
56 014	竹ノ塚遺跡	彦根市 箕ヶ森町	寺院・集落跡	弥生-奈良	平地	水田・宅地	
57 043	道ノ下遺跡	彦根市 東泊町	散居地	古墳-中世	平地	水田・宅地・工場地	
58 139	丁戸遺跡	彦根市 高宮町	散布地	古墳-中世	平地	水田・宅地	埋設土器・鹿角大珠
59 042	東泊波瀬遺跡	彦根市 東泊町	古墳	古墳	相地		
60 138	遊行保遺跡	彦根市 高宮町	散布地	奈良	平地	宅地	高宮寺跡?
61 052	竹ノ下遺跡	彦根市 野瀬山町	散布地	古墳-中世	平地	水田・宅地	
62 041	薄丸遺跡	彦根市 大町町・高宮町	集落跡	古墳-中世	平地	水田・宅地	
63 053	八反切削遺跡	彦根市 野瀬山町	散布地	古墳-中世	平地	水田	
64 140	高宮遺跡	彦根市 高宮町	城砦跡	中世	平地	宅地・学校用地	
65 141	カトリリ遺跡	彦根市 高宮町	散布地	古墳-平安	平地	水田	(參照)
69 065	甘田遺跡	彦根市 甘田町	寺院跡	古墳-中世	平地	水田	甘田寺跡伝承
70 019	上沢尻遺跡	彦根市 牛瀬町	古墳	古墳-中世	平地	水田	
71 121	門田遺跡	彦根市 篠町	散布地	古墳-奈良	平地	水田	
72 127	譲台寺遺跡	彦根市 篠町	城砦跡	中世	平地	相地・宅地	
73 063	寺村遺跡	彦根市 白夏町	散居地	古墳-平安	平地	水田・宅地	
76 130	鳩地遺跡	彦根市 鳩町	集落跡	古墳-平安	平地	水田・宅地	円墳
77 124	石原山遺跡	彦根市 住吉町	散布地	古墳-平安	平地	水田・宅地	
78 125	辻ノ東遺跡	彦根市 辻堂町	散布地	古墳-奈良	平地	水田・畠地・宅地	
79 123	神ノ木遺跡	彦根市 合龍寺町	集落跡	縄文-奈良	平地	水田・社地	円墳
81 117	覗ヶ池遺跡	彦根市 川瀬馬場町	散布地	古墳-平安	平地	水田・相地	
82 118	杉田遺跡	彦根市 川瀬馬場町	散布地	古墳-平安	平地	水田・工場用地	
83 119	西南遺跡	彦根市 川瀬馬場町	散布地	古墳-平安	平地	水田・庭園	
84 120	天田遺跡	彦根市 植村寺町	散布地	古墳-平安	平地	水田・畠地・宅地	
85 121	極楽寺遺跡	彦根市 極楽寺町	集落跡	古墳-奈良	平地	水田・宅地	
86 122	辻ノ東遺跡	彦根市 星谷町	集落跡	古墳-平安	平地	水田・宅地	
87 116	鶴雄北遺跡	彦根市 丙子塚町	古墳群・墓葬跡	古墳-中世	平地	水田・畠地・松林	円墳
88 111	西原山遺跡	彦根市 丙子塚町	古墳	古墳	平地	水田	
140 131	南原山遺跡	彦根市 丙子塚町	古墳	古墳	平地	水田	円墳
141 109	法士南遺跡	彦根市 敷地町	散布地	古墳-中世	平地	水田・宅地	
142 115	川瀬馬場遺跡	彦根市 川瀬馬場町	集落跡	縄文-中世	平地	水田・宅地	
143 108	鶴雄南遺跡	彦根市 鶴雄町	散布地	古墳-中世	平地	水田・宅地	
146 197	尼子西遺跡	彦根市 出町	集落跡	奈良-平安	平地	宅地	
153 008	平田城跡	彦根市 平田町	城砦跡	中世	平地	宅地	
154 009	平田山城跡	彦根市 平田町	城砦跡	中世	平地	宅地・社地	
155 011	小家郡跡	彦根市 小家町	城砦跡	中世	平地	宅地	
156 021	大字城跡	彦根市 宇尾町	城砦跡	中世	平地	水田・宅地	
159 035	近石郡跡	彦根市 東泊町	城砦跡	中世	平地	水田	
160 036	岡田城跡	彦根市 岡町	城砦跡	中世	平地	山林・宅地	
161 040	大崩城跡	彦根市 大崩町	城砦跡	中世	平地	水田	
162 045	地藏城跡	彦根市 地藏町	城砦跡	中世	平地	水田	
163 051	野田山城跡	彦根市 野田山町	城砦跡	中世	平地	山林	瓦窯跡
165 056	今村城跡	彦根市 今町	城砦跡	中世	平地	水田・宅地	
174 094	熊城跡	彦根市 熊町	城砦跡	中世	山頂	その他	
180 107	恩慶城跡	彦根市 熊町	城砦跡	中世	平地	宅地	
182 126	蓬台寺城跡	彦根市 蓬台寺町	城砦跡	中世	平地	水田	
183 128	蟹城跡	彦根市 蟹町	城砦跡	中世	平地	水田	
203 200	御傳山遺跡	彦根市 正法寺町	古墳	古墳	山頂	山林	宿禰石斧の発見地



図4 試掘調査のトレチ位置図



1. にぶい黄褐色粘質土層（表土・近現代耕作土）
2. にぶい黄褐色粘質土層（耕作土）
3. 灰黃褐色粘質土層
4. 黄褐色粘質土層（造構面：基盤層）
5. にぶい黄褐色粘質土層（基盤層）
6. 褐色砂礫混じり粘質土層（基盤層）
7. 黄灰色砂礫層（基盤層）

◀ : 造構検出面

図5 試掘調査土層断面柱状図

帶に位置する。古代の犬上郡青根郷の中核部と推定され、かつての調査で白鳳時代の川原寺式瓦が出土している。屋中寺廃寺遺跡は上岡部町字屋中寺ほかに位置する。採集瓦より白鳳時代の寺院と考えられており、石田茂作氏により法隆寺式あるいは法起寺式の伽藍配置が推定されている。この寺跡の東隣接地に、川原寺（弘福寺）の莊園、平流莊の推定地が広がる。下岡部廃寺は下岡部町の墓地付近に位置したと推定されている。採集瓦より白鳳時代の寺院と考えられるが遺構は確認されておらず伽藍配置などは不明である。ただ、昭和3年の耕地整理以前は当該地には「大村」という小字が残っていた。天平勝宝3年（751）の絵図「近江国難流村龜田地図」に「大村寺」と確認され、小字地名との関わりから、下岡部廃寺

がかつての大村寺であった可能性が推定されている。普光寺廃寺は普光寺町の広浜神社境内周辺と考えられており、神社境内には巨大な塔心礎が残っている。出土瓦より白鳳時代の寺院と考えられるが伽藍配置などは不明である。彦根市域における白鳳期の集落遺跡の状況は、未だ明らかになっていないが、奈良・平安時代に入ると、品井戸遺跡・竹ヶ鼻廃寺遺跡・福満遺跡・法士南遺跡・丁田遺跡などで掘立柱建物跡が検出されているため、これらの中に前代の遺構が含まれている可能性がある。奈良時代においては、竹ヶ鼻廃寺遺跡の南東2km付近に、畿内と東国を結ぶ推定東山道が通過しており、交通・流通面において重要な地域であったといえる。この時期、竹ヶ鼻廃寺遺跡や品井戸遺跡では、大型の掘立柱建物や、硯・石帶・銅匙などの官衙的遺構・遺物が確認されており、これらより現在のJR南彦根駅周辺は犬上郡の郡衙比定地となっており、古代犬上郡における中心地であったと考えられている。また、前述の古代寺院への瓦の供給が想定される、瓦陶兼業窯の鳥籠山遺跡（正法寺瓦窯跡）や、製鉄遺跡であるキドラ遺跡などの生産遺跡も確認されている。

宇曾川以南では、奈良時代の遺跡は顕著でなく、愛知川に近い国領遺跡で確認される程度である。しかし、荒神山北側の東大寺領霸流莊の存在は特筆されるであろう。正倉院に残る墾田地図によると、愛知、犬上両郡にまたがる70町が東大寺に施入され、霸流莊が成立した。また、延久2（1070）年の『近江国弘福寺領庄田注進状』により愛知郡2条7里・8里・3条16里に弘福寺領平流莊が存在したことが記されており、さらに和銅2（709）年の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田老拾毫町毫段參拾陸歩」とみえることから、弘福寺領平流莊は8世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。また、この時期の宇曾川流域では、少し上流側の長野遺跡・なます遺跡・沓掛遺跡（愛荘町）を中心に遺跡は展開する。これらの遺跡の近くには古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されており、当該期の中心的役割をなした地域と考えられている。平安時代になると国領遺跡で前代に引き続き集落が営まれるが、普光寺廃寺や芝原遺跡でも遺構・遺物が確認されるようになる。特に、芝原遺跡では京都産綠釉陶器皿・畿内産黒色土器碗・灰釉陶器皿の転用硯がまとまって出土しており、一般集落とは異なる様相がみてとれる。

中世 中世では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落が国領遺跡、普光寺廃寺遺跡、市遺跡で営まれる。また、湖上交通が活発化し、市域では松原・薩摩・柳川・三津屋・石寺・須越・八坂が営まれる。そのような中にあって、宇曾川流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15世紀末から16世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、琵琶湖と宇曾川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空間であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曾川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置する。道路や土塁で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと捉えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋

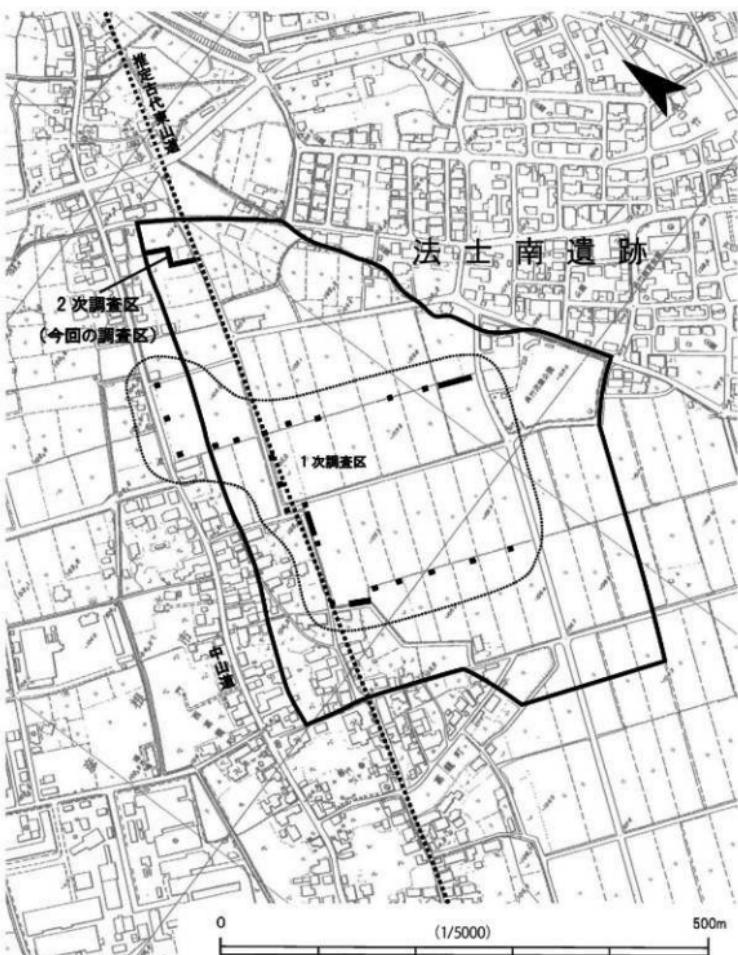


図6 法士南遺跡の調査位置図

表2 法士南遺跡の発掘調査一覧

調査 次数	調査地/調査面積 (m ²) / 調査原因	調査期間	調査主体	主な時代	主な検出遺構・遺物	文献
1	法士町 地先 ほ場整備	1989年7月 ～ 1990年3月	彦根市教育委員会	古墳時代後期～ 奈良時代	溝、土坑、小穴、竪穴建物、 掘立柱建物、土師器、須恵器	1
2	法士町字中ノ道25-1 外4番 97 太陽光発電施設設置工事	2021年4月 ～ 2021年5月	彦根市	飛鳥時代～ 奈良時代	溝、土坑、小穴、竪穴建物、 槽（または掘立柱建物）、道路遺構、 土師器、須恵器、抱石陶器	本書

文献

1 彦根市教育委員会 1990「法士南遺跡・門田遺跡」彦根市教育委員会文化財調査報告書第19集

敷遺跡では、道路や土壘で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも、日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

中世後半期では、北の京極・浅井氏と南の六角氏の軍事的衝突が活発化し、市域一帯は、ちょうど両勢力がぶつかり合う地理的関係上、佐和山城や肥田城などの城館が活発に営まれ、佐和山城に関してはその地理的・軍事的重要性より、その後も織田勢力、豊臣勢力へと引き継がれていく。

(3) 法士南遺跡の概要と既往調査（図6、表2）

法士南遺跡は、彦根市法士町に位置する古墳時代から中世にかけての複合遺跡である。遺跡は鈴鹿山系から琵琶湖に注ぐ犬上川左岸、標高104～105mの扇状地に位置する。調査地周辺一帯は、中山道沿いなど一部では宅地化がすんでいるものの、広い範囲で水田や畠などの耕作地としての土地利用が広がっている地域である。今回の調査地点も、開発計画以前は水田としての土地利用が行われていた。過去には、ほ場整備事業に伴い1度本発掘調査が実施されている。

法士南遺跡で実施された本発掘調査について振り返る。法士南遺跡第1次調査地は、今回の調査地の南西約200～450mに位置する。ほ場整備事業に伴い実施した記録保存を目的とする本発掘調査である。ほ場整備事業の範囲は広大であるが、その中でも調査は排水路予定地を中心調査区を設定して実施した。調査では、古墳時代後期～奈良時代にかけての遺構・遺物が確認されており、複数の堅穴建物や掘立柱建物、溝、土坑などが検出されている。また、古代東山道の推定地周辺でも複数の調査区が設定されているが、報告書ではそれら調査区の調査内容には触れておらず、平面図も掲載されていないため詳細は不明である。

参考文献

- 足利健亮 1985「第7章 近江の土地計画」『日本古代地理研究』大明堂発行
- 滋賀県立安土城考古博物館 2006『扇状地の考古学』
- 彦根市 2007『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世
- 彦根市教育委員会 1990『法士南遺跡・門田遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第19集
- 文化庁 2010『発掘調査の手引き一集落遺跡発掘編一』

第2章 発掘調査の成果

第1節 基本土層

(1) 基本土層(図7・8・写真2)

調査地は、開発予定地全域が耕作地としての土地利用がなされていた。基本層位としては、I～IV層に分類できる。I層：近現代耕作土層(にぶい黄橙色粘質土、にぶい黄褐色粘質土)、II層：耕作土床土層(にぶい黄色粘質土、にぶい褐色粘質土)、III層：包含層(灰黄褐色粘質土)、IV層：基盤層(黄褐色粘質土)である。包含層であるIII層直下のIV層上面が遺構検出面となる。遺構面の標高は、調査区全域で104.5m前後を測り、ほぼ平坦な状況であった。これは、犬上川の洪水に伴うもの、または、過去の耕作地開墾に伴い地面をフラットにするため削平を受けた結果であると推察される。



写真2 調査区北東壁(C-C') 土層断面

第2節 検出遺構と遺物

(1) 概要(図9)

調査区全域で遺構・遺物が検出された。主に7世紀後半から8世紀前半にかけてのもので、柵(または掘立柱建物)、竪穴建物、溝、土坑、小穴など集落関連の遺構が確認された。特に、調査区の南東端で検出された溝は道路遺構、すなわち古代東山道に関連する遺構と推定される。なお、推定古代東山道の方位は、犬上郡における条里地割と同一軸をとり、東に31度から34度程度傾いた方位をとる。

(2) 竪穴建物(SH18)

SH18(図10・15、表4)

調査区の中央付近で検出された遺構で竪穴建物と推定される。調査区が限られているため全体を検出できていないが、平面形が方形と想定され、検出部での最大幅は約3.90m、深さは約0.20mを測る。平面プランの方向軸は、推定古代東山道の方位と同一軸である。竪穴の内部には、主柱穴になりうる小穴が複数検出されており、中央部には土坑も認められる。また、炭化物が多く含まれる範囲も検出されているが床面に直接の被熱痕は認められない。

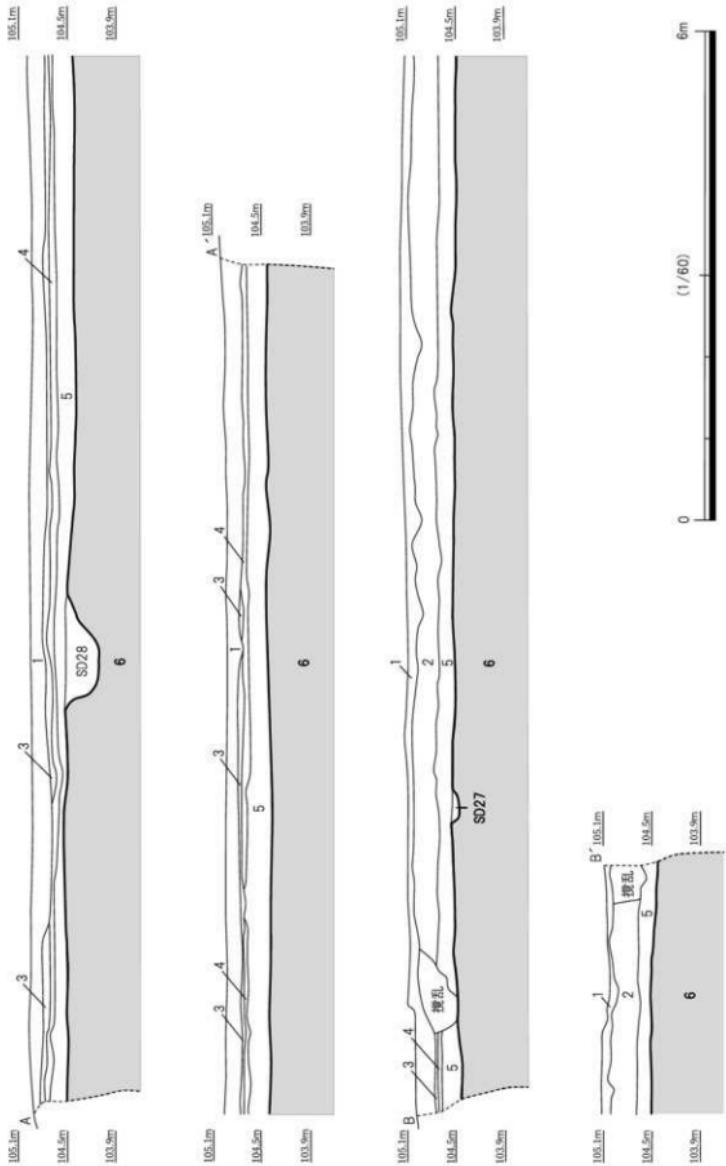


图 7 调查区北东翼 (A-A') * 南冀壁 (B-B') 土剖面剖面图

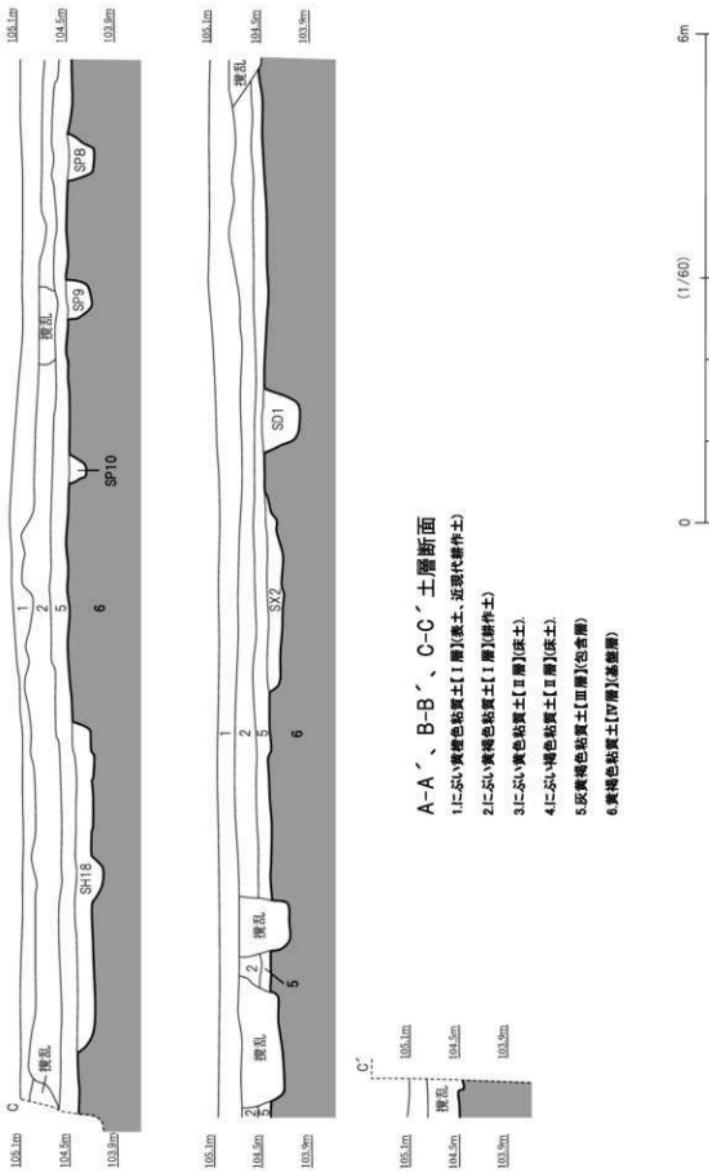


図8 調査区北東壁 (C-C') 土層断面図

遺物は、土師器（15）と須恵器（16・17）が出土した。

15は、土師器の甕の口縁部である。16は須恵器の环身で、平底の环身で底部と体部との境界が明瞭に屈曲し、口縁部はまっすぐに立ち上がる。口径は11.5cm、底径は8.8cm、器高は3.1を測る。17は、須恵器の甕の体部片と思われ、外部に明瞭なタタキの痕跡が認められる。

SH18の時期は、出土遺物より7世紀末～8世紀前半と考えられる。

（3）柵or掘立柱建物（SA1、SA2）

SA1（図11、表3）

調査区の中央付近で検出された柵あるいは掘立柱建物である。主軸方向は、推定古代東山道と同一方向をとる。柱穴は、SP21～SP25で構成され、掘り方は円形を基本とし、直径は約0.28～0.30m、深さは約0.15～0.25mを測る。

遺物が出土していないため、時期を比定し得ないが、推定古代東山道や堅穴建物SH18、柵SA2と同一軸をとるため、概ねこれらと同一時期と推定される。

SA2（図12・15、表3・4）

調査区の南側で検出された柵あるいは掘立柱建物である。主軸方向は、推定古代東山道と直交するため、同一軸に揃っている。柱穴は、SP8～SP10で構成され、掘り方は円形を基本とし、直径は約0.28～0.49m、深さは0.13～0.25mを測る。

遺物は、土師器の甕（14）である。推定古代東山道や堅穴建物SH18、柵SA1と同一軸をとるため、概ねこれらと同一時期と推定される。

（4）道路遺構（SF1）

SF1（図13・15、表4）

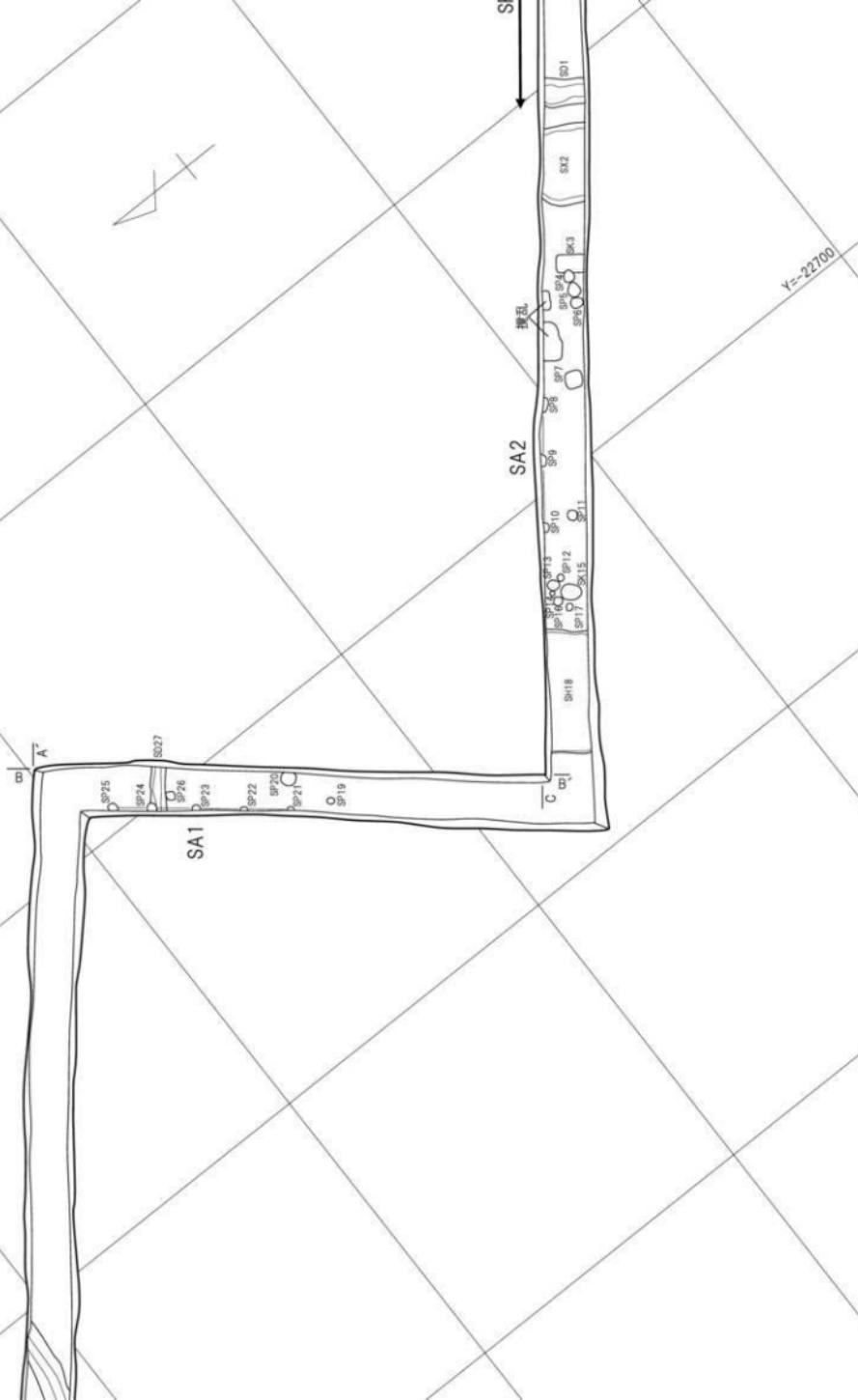
前述したように、調査区の南東沿いに走る南北方向の市道が古代東山道の推定ルートである。今回の調査では、古代東山道に関わる遺構が検出される可能性が想定されたが、調査区の南端部で、古代東山道と軸を揃える溝SD1が検出された。すなわち、SD1が古代東山道の西側溝で、その東側の無遺構範囲が路面と推定される。路面は、後世の削平などの影響もあるためか、硬面や構築状況を示すものは特に認められなかった。ただし、SD1には10～30cm大の複数の疊が溝の底部より浮いた状態で検出されており、あるいは路面補強に使用されていた疊が2次堆積した可能性も想定される。また、SD1には水が流れていた状況は認められなかつた。

なお、SD1の西側に隣接するSX2も、道路遺構に関連する可能性がある。

（5）溝（SD1・SD27・SD28）

SD1（図13・15、表4）

調査区の南端部で検出された溝である。検出はわずかであるが、検出できている長さは約



1.30m、幅約0.74m、深さ約0.46mを測り、断面U字状を呈す。推定古代東山道の西側側溝と考えられる。埋土は、1層：にぶい黄褐色礫混じり粘質土、2層：黒褐色粘質土、3層：褐色粘質土の3層で、水が流れていた状況は認められなかった。また、1層と2層には10~30cmの大の礫が複数認められ、地山ブロック土も混じることより人為的な堆積の可能性を考えられる。礫は路面の補強に使用されていたものが2次堆積した可能性も想定しておきたい。

遺物は、須恵器の坏身（9・10）が出土した。

9は須恵器の坏身で、立ち上がり部が短く内傾する。口径11.9cm、残存器高2.8cmを測る。
10は須恵器の坏身で、方形の高台が取り付く。底径12.0cm、残存器高0.9cmを測る。

SD1の時期は、出土遺物からは7世紀後半~8世紀前半と考えられる。

SD27（図14）

調査区の中央付近で検出された溝である。検出はわずかであるが、検出できている長さは約1.40m、幅約0.50m、深さ約0.16mを測り、断面U字状を呈す。推定古代東山道と直交する方位をとる。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。SP24とSP26に切られる。

遺物は、出土していない。

SD28（図14）

調査区の北西端で確認された溝である。検出はわずかであるが、検出できている長さは約2.82m、幅約0.86m、深さは約0.43mを測り、断面は緩やかなV字状を呈す。溝の方位は、ほぼ正東西方向に乗っており、推定古代東山道やSD27とは方位軸が異なる。埋土は、1層：にぶい黄褐色砂礫混じり粘質土、2層：灰黄褐色砂礫層、3層：灰黄褐色礫層の3層が確認されており、2層以下が砂礫層であることと、断面がV字状を呈すことより、ある程度の水流を伴う水路であったと考えられる。調査区も限られているため、水路の用途は判然とはしないものの、ひとつつの可能性として灌漑用の水路を想定しておきたい。

遺物は、出土していない。

（6）土坑（SK3・SK15）

SK3（図14）

調査区の南側で検出された土坑である。調査区端にかかるため全体を検出できていないが、平面形は隅丸方形と推定される。残存長辺約0.88m、短辺約0.32m、深さ約0.19mを測る。埋土は、褐灰色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SK15（図14）

調査区の南側で検出された平面形が梢円形の土坑である。長辺約0.68m、短辺約0.50m、深さ約0.27mを測る。埋土は、1層：灰黄褐色粘質土、2層：褐灰色粘質土の2層である。

遺物は、出土していない。

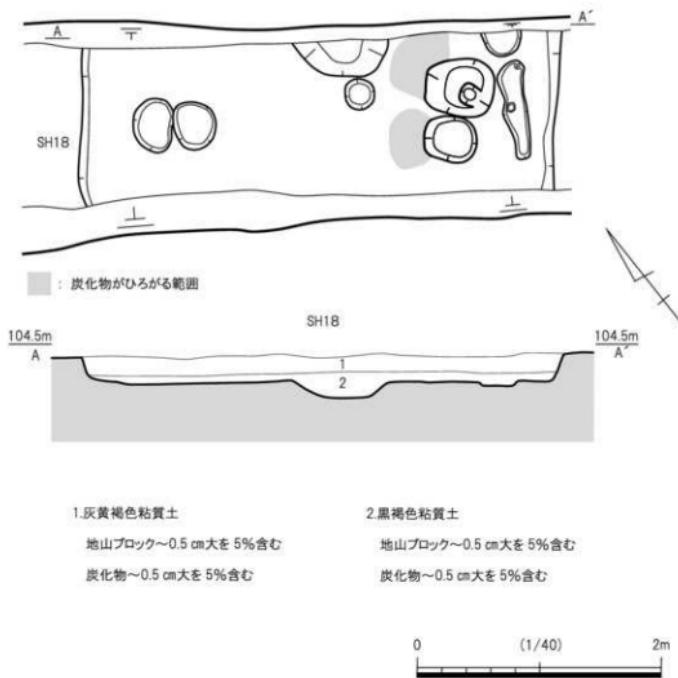


図10 窪穴建物（SH18）平面図・断面図

(7) 小穴 (SP4～SP14・SP16・SP17・SP19～SP26)

SP4 (図14・15、表4)

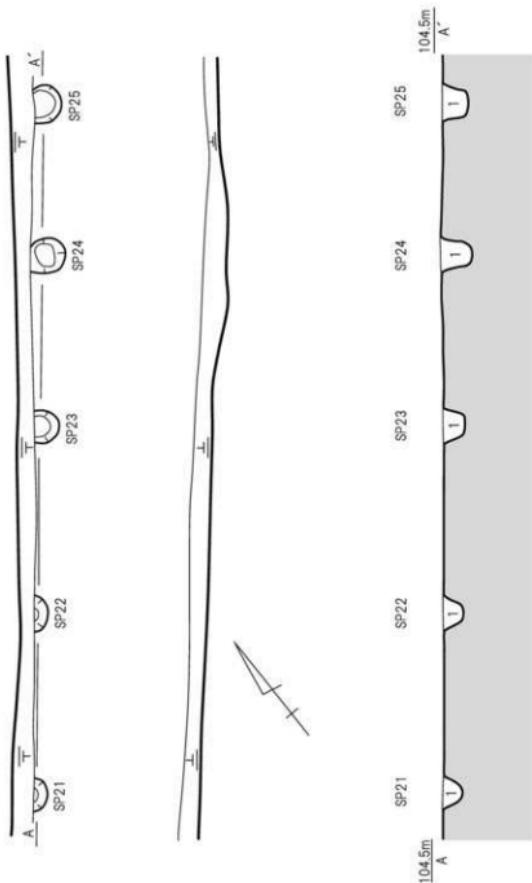
調査区の南側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.34m、短辺約0.31m、深さ約0.10mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層で、底部に礫が認められる。

遺物は、須恵器の坏身(12)が出土している。底部と体部との境界が明瞭に屈曲し、口縁部はまっすぐに立ち上がる。底部が平底か高台がつくかは不明である。口径は16.4cm、残存底径は12.4cm、残存器高は4.8cmを測る。

SP5 (図14)

調査区の南側で検出された平面形が楕円形の小穴である。長辺約0.46m、短辺約0.38m、深さ約0.22mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。



1.灰黄褐色粘質土
地山ブロック～1 cm大を 5%含む
炭化物～0.5 cm大を 5%含む

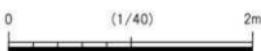


図 11 構 or 挖立柱建物 (SA1) 平面図・断面図

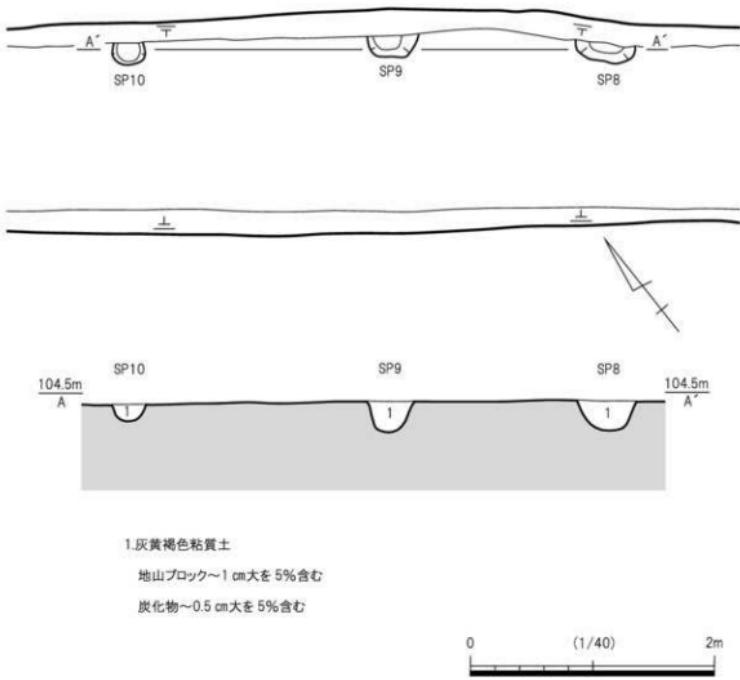


図12 柵 or 挖立柱建物 (SA2) 平面図・断面図

表3 柵 or 挖立柱建物穴一覧

建物	遺構	平面形	規模 (m)			出土遺物	備考	持因	写真 図版
			長さ(長幅)	幅(短幅)	深さ				
SA1	SP21	円	0.28	(0.10)	0.15			11	
	SP22	円	0.30	(0.10)	0.16			11	
	SP23	円	0.28	(0.18)	0.18			11	
	SP24	円	(0.30)	0.27	0.25		SD27を切っている。	11	
	SP25	円	(0.22)	0.30	0.22			11	
SA2	SP8	円	0.49	(0.13)	0.24	土師器 (14)		12	5
	SP9	円	0.42	(0.16)	0.25			12	5
	SP10	円	0.28	(0.18)	0.13			12	5

() 内は残存長。又は復元数値

SP6 (図14)

調査区の南側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.38m、短辺約0.32m、深さ約0.23mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

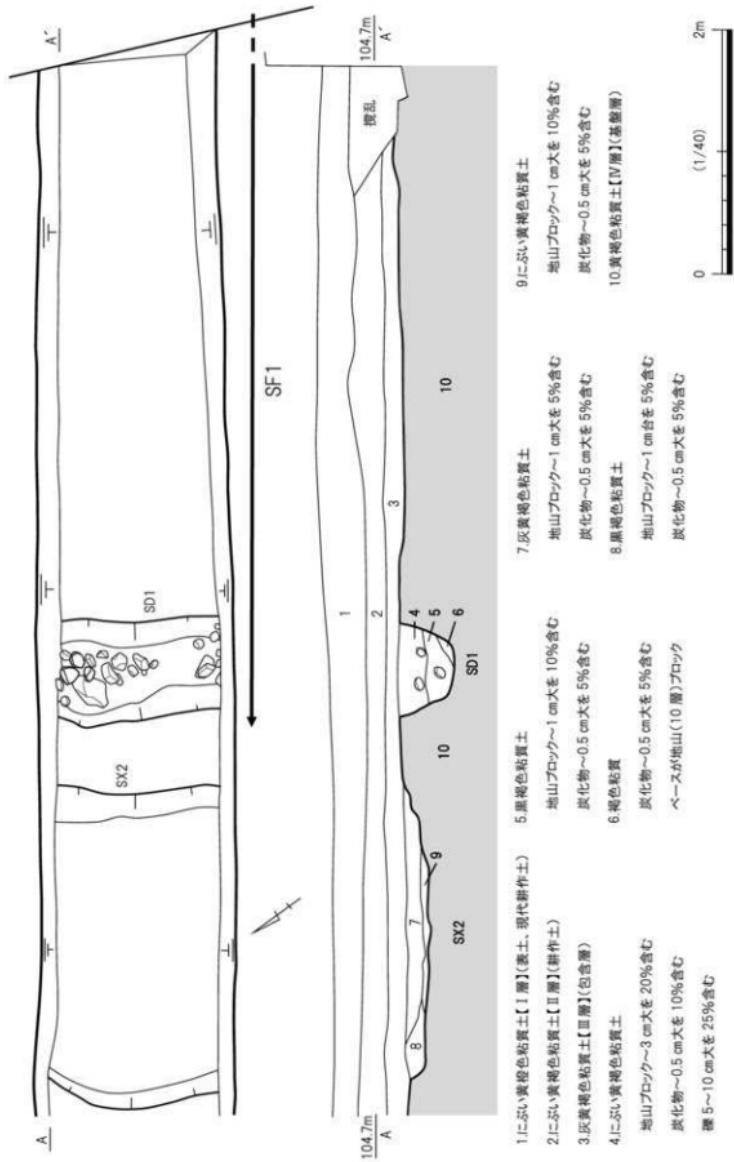


図 13 道路道構 (SF1) 平面図・断面図

SP7 (図14・15、表4)

調査区の南側で検出された平面形が隅丸方形の小穴である。長辺約0.55m、短辺約0.53m、深さ約0.31mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、須恵器の坏身の口縁部片(13)が出土している。

SP8 (図12・15、表3・4)

調査区の南側で検出されたSA2を構成する小穴である。調査区端にかかるため全形は確認できないが、平面形は楕円形と推定される。長辺約0.49m、残存短辺約0.13m、深さ約0.24mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、土師器の甕(14)が出土している。口縁部端部が、わずかに上部に内湾する。

SP9 (図12、表3)

調査区の南側で検出されたSA2を構成する小穴である。調査区端にかかるため全形は確認できないが、平面形は円形と推定される。長辺約0.42m、残存短辺約0.16m、深さ約0.25mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP10 (図12、表3)

調査区の南側で検出されたSA2を構成する小穴である。調査区端にかかるため全形は確認できないが、平面形は円形と推定される。長辺約0.28m、残存短辺約0.18m、深さ約0.13mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP11

調査区の南側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.32m、短辺約0.32m、深さ約0.24mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP12 (図14)

調査区の南側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.20m、短辺約0.19m、深さ約0.11mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP13 (図14)

調査区の南側で検出された平面形が楕円形の小穴である。長辺約0.44m、短辺約0.32m、深さ約0.22mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP14 (図14)

調査区の南側で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.18m、短辺約0.14m、深さ約0.11mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP16（図14）

調査区の南側で検出された平面形が楕円形の小穴である。長辺約0.34m、短辺約0.25m、深さ約0.13mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP17（図14）

調査区の東側で検出された平面形が楕円形の小穴である。長辺約0.25m、短辺約0.18m、深さ約0.10mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP19

調査区の中央付近で検出された平面形が円形の小穴である。長辺約0.24m、短辺約0.23m、深さ約0.20mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP20

調査区の中央付近で検出された小穴である。調査区端にかかるため全形は確認できないが、平面形は円形と推定される。長辺約0.44m、残存短辺約0.16m、深さ約0.24mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP21（図11、表3）

調査区の中央付近で検出されたSA1を構成する小穴である。調査区端にかかるため全形は確認できないが、平面形は円形と推定される。長辺約0.28m、残存短辺約0.10m、深さ約0.15mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP22（図11、表3）

調査区の中央付近で検出されたSA1を構成する小穴である。調査区端にかかるため全形は確認できないが、平面形は円形と推定される。長辺約0.30m、残存短辺約0.10m、深さ約0.16mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP23（図11、表3）

調査区の中央付近で検出されたSA1を構成する小穴である。調査区端にかかるため全形は確認できないが、平面形は円形と推定される。長辺約0.28m、残存短辺約0.18m、深さ約0.18mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP24（図11、表3）

調査区の中央付近で検出されたSA1を構成する小穴でSD27を切っている。調査区端にかかるため全形は確認できないが、平面形は円形と推定される。残存長辺約0.30m、短辺約0.27m、

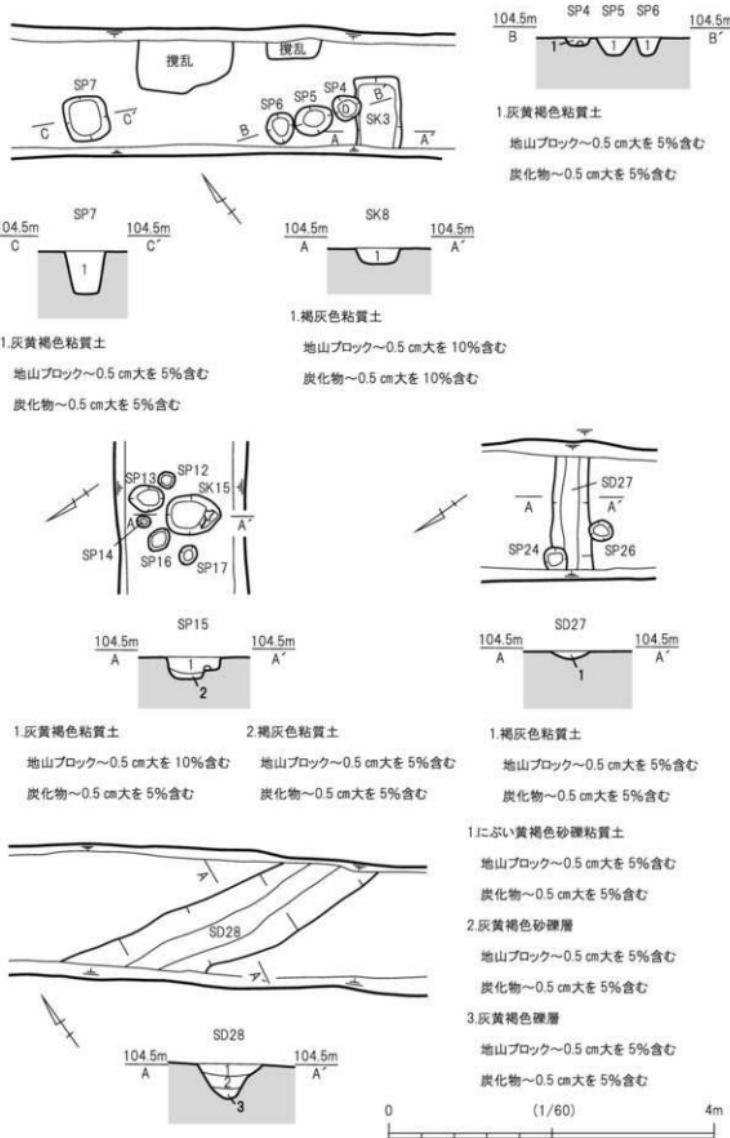
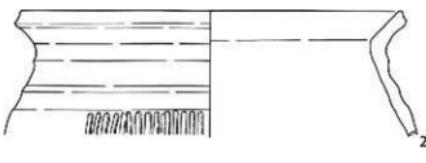
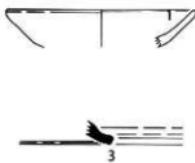


図 14 各造構 平面図・断面図

【試掘：T4】



【包含層】



【SP4】



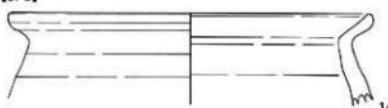
【SD1】



【SP7】



【SP8】



【SH18】



図 15 出土遺物実測図

表4 出土遺物一覧

南組 No.	出土地点	面積	形状	部位	残存率 (原寸)	法面 (m) 口幅 幅大径 流部厚 厚さ	鉢土	焼成	色 調				備 考			
									外 表		内 面					
									(裏)	(縁)	(裏)	(縁)				
1	MBET4	土壌層	牙	口縁部	10%以下	11.6	—	—	(2.2)	黒	黒	7SYR	B/4流底部	7SYR	B/3流底部	
2	MBET4	土壌層	裏	口縁部~側部	10%以下	23.0	—	—	(7.6)	黒	やや黒	SYR	B/2底白	SYR	B/2底白	
3	MBET4	土壌層	环	口縁部	10%以下	—	—	—	(1.4)	黒	黒	SY	B/1底	SY	B/1底	
4	MBET4	土壌層	环身	口縁部	10%以下	—	—	—	(3.6)	黒	黒	N	7/灰白	N	7/灰白	
5	MBET4	土壌層	环	口縁部	10%以下	16.3	—	—	(1.8)	黒	黒	N	7/灰白	10Y	7/1灰白	
6	MBET4	土壌層	裏	口縁部~側部	10%以下	—	—	—	(7.0)	黒	やや黒	N	7/灰白	N	7/灰白	
7	MBET5	土壌層	环身	底部	10%以下	—	—	10.6	(1.1)	黒	黒	N	6/灰	2SY	6/1底	底部外側に付着物 10YR1.7/1黒
8	SH18ME 砂質陶器	土壌層	裏	口縁部	10%以下	—	—	—	(2.4)	黒	黒	SY	6/4オリーブ黄	2SY	6/4にLSL黄	鉢土 2SY 7/2灰黄
9	SD1	土壌層	环身	口縁部~側部	10%以下	11.9	—	—	(2.8)	黒	黒	N	6/灰	SY	6/1灰	
10	SD1	土壌層	环身	底部	10%以下	—	—	12.0	(0.9)	黒	黒	SY	6/3オリーブ黄	SY	6/1底	内面に凹痕有り、 輪SY4/2オリーブ黄
11	SX2	土壌層	环身	底部	10%以下	—	—	7.6	(2.6)	黒	黒	10Y	6/1灰	N	6/灰	
12	SP4	土壌層	环身	口縁部~側部	10%以下	16.4	—	12.4	(4.8)	黒	黒	2SY	6/1灰	2SY	7/1灰白	
13	SP7	土壌層	环身	口縁部	10%以下	—	—	—	(2.6)	黒	黒	10YR	7/1灰白	2SY	7/1灰白	
14	SP8	土壌層	裏	口縁部	10%以下	22.2	—	—	(5.6)	黒	黒	7SYR	6/4にLSL構	7SYR	5/3にLSL構	内面に擦り付着、底 7SYR 6/1灰
15	SH18	土壌層	裏	口縁部	10%以下	—	—	—	(2.1)	やや粗	黒	10YR	7/3にLSL構	7SYR	B/3流底部	
16	SH18	土壌層	环身	口縁部~側部	30%程度	11.5	—	BB	3.1	黒	黒	N	5/灰	N	5/灰	
17	SH18	土壌層	裏か	底部	10%以下	—	—	—	(4.0)	黒	黒	N	5/灰	N	5/灰	

深さ約0.25mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP25 (図11、表3)

調査区の中央付近で検出されたSA1を構成する小穴である。調査区端にかかるため全形は確認できないが、平面形は円形と推定される。長辺約0.30m、残存短辺約0.22m、深さ約0.22mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

SP26 (図14)

調査区の中央付近で検出された平面形が円形の小穴でSD27を切っている。長辺約0.30m、短辺約0.27m、深さ約0.12mを測る。埋土は、灰黄褐色粘質土の1層である。

遺物は、出土していない。

(8) その他 (SX2)

SX2 (図13・15、表4)

調査区南側で検出された落ち込み状の遺構である。調査区端にかかるため全形は確認できないが、SD1に平行しながら南北に伸びている可能性がある。SD1に平行する遺構であるならば、古代東山道に関わる遺構の可能性があるが、今回の調査では判断ができない。残存長辺約1.17m、短辺（幅）約2.58m、深さ約0.21mを測る。埋土は、1層：灰黄褐色粘質土、2層：黒褐色粘質土、3層：にぶい黄褐色粘質土の3層である。

遺物は、須恵器の坏身（11）が出土した。

(9) 小結

今回の調査では、7世紀末～8世紀前半と推定される古代東山道関連遺構と集落関連遺構を確認した。当該期の遺構は竪穴建物1軒（SH18）と柵2条（SA1・SA2、あるいは掘立柱建物2棟かもしれない）と複数の溝、土坑、小穴であった。

調査区の南東沿いに走る南北方向の市道が古代東山道の推定ルートであるが、その推定ルート沿いに古代東山道の西側溝と考えられる溝（SD1）を確認した。また、検出した竪穴建物（SH18）や柵（SA1・SA2）、溝（SD27）などは、推定古代東山道と主軸方向を揃えており、これらは一体のものの可能性が高い。このように、今回の調査では、古代東山道関連遺構とその東山道沿いの集落関連遺構を確認することができたと考える。

参考文献

- 足利健亮 1985『第7章 近江の土地計画』『日本古代地理研究』大明堂発行
滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1998『尼子西遺跡2』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XXV-2
滋賀県立安土城考古博物館 2006『扇状地の考古学』
彦根市 2007『新修彦根市史』第1巻通史編 古代・中世
彦根市教育委員会 1990『法士南遺跡・門田遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第19集

第3章 総 括

第1節 法士南遺跡第2次発掘調査検出の道路遺構と今後の課題

(1) はじめに

今回の調査は、古代東山道と推定される道路遺構とそれと同一主軸方向を持つ建物遺構などを確認することができ、地域の古代史を解明する上で貴重な調査成果を得ることができた。ここでは、改めて道路遺構（SF1）に関して若干の検討を加え、まとめとしたい。

(2) 犬上川左岸扇状地上における古代東山道の既往調査と研究の整理

古代近江の東山道研究の先駆は、足利健亮氏が行った歴史地理学的実証研究である。当該研究は東山道研究の先駆的なものであり、その後の調査・研究にも多大な影響をおよぼしている。それによると、近世中山道は、基本的に古代東山道のルートを踏襲しているとした上で、所々でルートが振り、断続的に直線的な中山道とは異なり、古代東山道は完全な直線道であると想定した。法士南遺跡がひろがる犬上川左岸扇状地上では、中山道が犬上川付近～四十九院付近の区間でやや琵琶湖側にルートを振っているが、この区間の古代東山道のルートは、中山道のルートとは異なり、その東側に南北にのびる直線ルートとして推定された(図16)。

上記の研究成果を踏まえて、平成6年度に尼子西遺跡で、この推定東山道ライン上で発掘調査が行われ、古代東山道と考えられる道路遺構が検出された。足利氏の推定した東山道ラインが、考古学的調査でも裏付けられたのである。この調査で明らかにされた道路遺構の特徴について、以下に箇条書きする。

- ① 足利氏の推定東山道ライン上で検出された。
- ② 検出した道路遺構は、主軸を N-33° -E に向けた直線道であり、犬上郡条里地割の方位と合致する。確認できている道路遺構の規模は、総延長が約318m、路面幅が約12m、両側溝巾々で約15mもあり、近世の中山道よりはるかに幅広の直線道である。
- ③ 近接した位置で検出された建物遺構は、すべて道路遺構に方位を揃えている。
- ④ 側溝から出土した土器の年代は8世紀後半～9世紀、道路遺構と方位を揃える堅穴建物から出土した土器の年代は8世紀前半、道路遺構に伴う側溝を切る溝から出土した土器の年代は12世紀であったことから、検出された推定東山道は、8世紀前半には造営されており、12世紀以前に道路としての機能を失ったものと考え

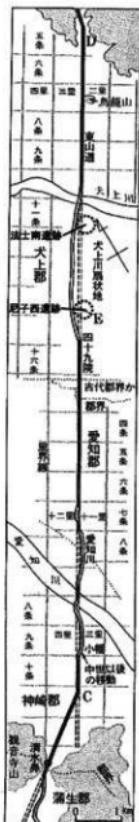


図16 神崎郡一犬上郡間の東山道推定ルート(足利氏1985より転載・追記)

られる。

- ⑤ 検出された道路面から、東山道が機能していた時期の遺構は検出されなかった。
- ⑥ 道路遺構に伴う側溝は一定した深さに掘り込まれておらず、凹凸が甚だしい。また、土層断面の観察より水が流れた痕跡は確認されなかった。
- ⑦ 道路遺構は1度改修されており、2期の道路遺構が確認された。改修にあたり、若干西側にスライドしているが、幅員などの規模に変更はない。

以上が、尼子西遺跡の調査で確認された推定東山道の特徴である。

(3) 道路遺構 (SF1) の検討と今後の課題

それでは、法士南遺跡の道路遺構に関して、上記尼子西遺跡の道路遺構の特徴との比較を通じて、若干の検討を加える。

まず、①については、今回の法士南遺跡の調査でも足利氏の推定東山道ライン上で検出された。②については、調査範囲が狭いため、道路幅などは不明だが、側溝 (SD1) の主軸は同方向を向く。③については、今回検出された堅穴建物、櫛or掘立柱建物も全て道路遺構と同方向である。④については、側溝から出土した土器の年代は7世紀後半～8世紀前半、堅穴建物から出土した土器の年代は、7世紀末～8世紀前半であったことから、道路遺構は、概ね7世紀後半～8世紀前半には機能していたと考えられる。⑤については、道路面からは、どの時期の遺構も検出されていない。⑥については、側溝の土層断面の観察からは水の流れた痕跡は確認されなかった。なお、SD1からは多量の礫が検出されたが、兵庫県和田山町加都遺跡では、大量の礫で補強された道路遺構が検出されており、あるいは、今回確認された礫も補強で使用されたものが、2次堆積した可能性があると考えている。⑦については、今回の調査では改修の有無は確認できなかったが、落ち込み状遺構であるSX2が改修に伴う溝の可能性は想定される。以上のように、尼子西遺跡で確認された推定東山道の特徴と、今回法士南遺跡で検出された道路遺構の特徴は概ね合致していることが確認できた。調査範囲が限られているため、検出されている道路面も狭く、そもそも道路遺構両側の側溝が確認されていくわけではないので、判断は慎重ではあるべきだが、上記のように、足利氏の推定東山道ライン上に乗っており、尼子西遺跡検出の推定東山道の特徴とも概ね合致していることより、今回、推定東山道の道路遺構と判断した。今後、周辺地域の調査の機会があれば、道路幅の確定や改修の有無の確認などが課題となっていくであろう。

参考文献

- 足利健亮 1985「第7章 近江の土地計画」『日本古代地理研究』大明堂発行
- 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1998『尼子西遺跡2』ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XXV-2
- 吉識雅仁・甲斐昭光「兵庫県和田山町加都遺跡の道路遺構」『古代交通研究』第8号



調査前風景〔北より〕



調査前風景〔北東より〕



土層断面〔南西より〕



調査区全景 (C-C') [南東より]



調査区全景 (B-B') [南西より]



調査区全景 (A-A') [北西より]



道路遺構 (SF1) [北西より]



道路遺構 (SF1) [北西より]



道路遺構 (SF1) [北西より]



溝（SD1）検出状況〔南西より〕



溝（SD1）礫検出状況〔北西より〕



溝（SD1）完掘状況〔南西より〕



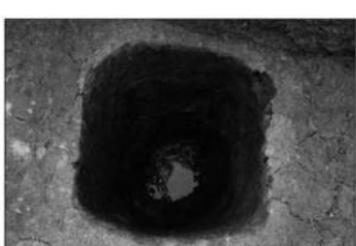
溝（SD1）土層断面〔南西より〕



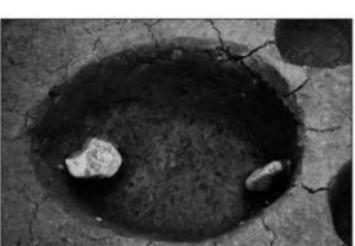
落ち込み（SX2）完掘状況〔北西より〕



土坑（SK3）完掘状況〔南東より〕



小穴（SP7）完掘状況〔北東より〕



土坑（SK15）完掘状況〔南東より〕

図版五



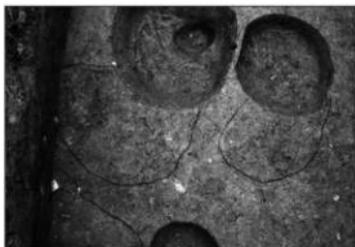
竪穴建物 (SH18) 検出状況 [北西より]



竪穴建物 (SH18) 完掘状況 [北西より]



竪穴建物 (SH18) 土層断面 [西より]



竪穴建物 (SH18) 炭化物集中範囲 [北西より]



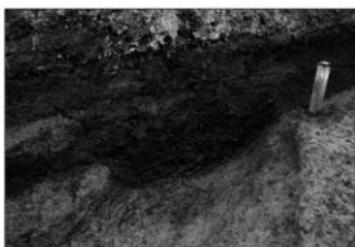
竪穴建物 (SH18) 遺物出土状況 [北西より]



柵 or 挖立柱建物 (SA2) 完掘状況 [南より]



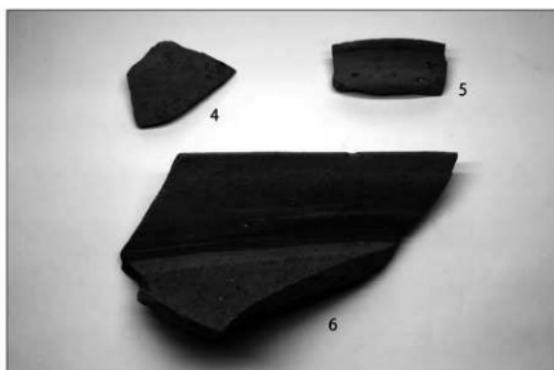
溝 (SD28) 完掘状況 [西より]



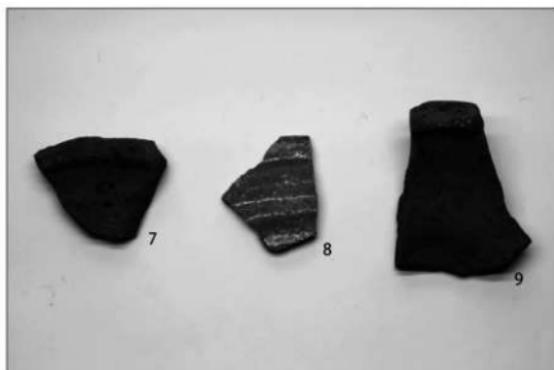
溝 (SD28) 土層断面 [西より]



試掘T4 出土遺物



試掘T4 出土遺物



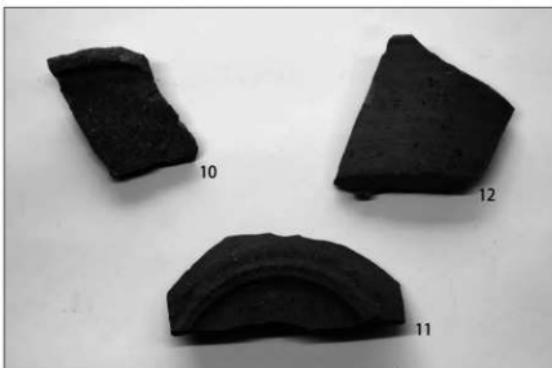
試掘T5：7

包含層：8

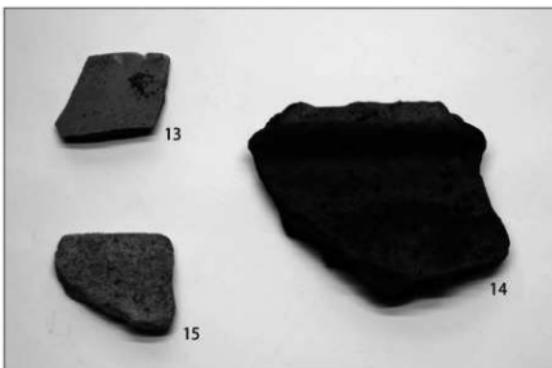
SD1：9

出土遺物

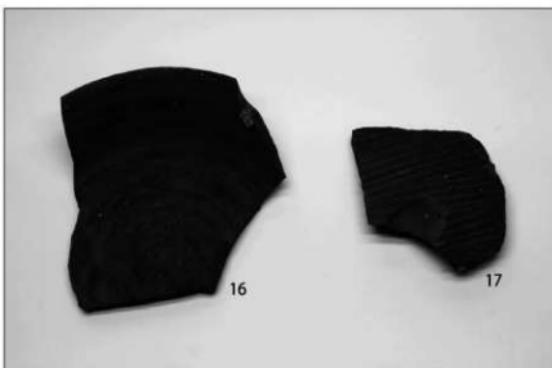
圖版七



SD1 : 10
SX2 : 11
SP4 : 12
出土遺物



SP7 : 13
SP8 : 14
SH18 : 15
出土遺物



SH18 出土遺物

報告書抄録

彦根市埋蔵文化財調査報告書第87集
法士南遺跡第2次発掘調査報告書

－太陽光発電施設設置工事に伴う発掘調査－
令和4年(2022年)3月発行

編集・発行：彦根市歴史まちづくり部文化財課
彦根市元町4番2号
TEL 0749-26-5833
印刷・製本：有限会社田中印刷所

HOZEMINAMI SITE

2022